

## 読売新聞 きょう（7月30日）のイチ押し

### 1面・社会面 「黒い雨」被爆者認定

広島への原爆投下直後に降った「黒い雨」で健康被害を受けたとして、84人が被爆者健康手帳の交付を求めた訴訟で、広島地裁は、原告全員を「被爆者」と認め、広島県・市に手帳の交付を命じました。「黒い雨」による被爆を巡る司法判断は初めてで、原告側の全面勝訴となりました。

- ★ 国は、原爆投下直後の調査を基に、援護区域を指定していましたが、判決では最近の調査も考慮に入れ、雨は広範囲に降ったと判断。援護区域外の原告らの証言は信用できるとして被爆者と認定しました。
- ★ 判決は、被爆の可能性を否定できない人を広く救済するという被爆者援護法の趣旨にかなうものです。

### 一面・社会面など コロナ 全国で1260人感染

新型コロナウイルスの感染者が新たに1260人確認され、1日当たり初めて1000人を超えました。大阪、愛知、福岡で過去最多です。

- ★ 大阪の新規感染者は221人で、初めて200人を突破しました。若い世代が中心で、大半は軽症か無症状ですが、感染経路不明者の割合が74%となっており、高い水準が続いています。
- ★ 大阪府の吉村知事は、感染防止策を守らずにクラスターを発生させた飲食店の店名を公表する考えを示し、大阪市の松井市長は、陽性率が高いエリアに限定して休業要請を行う案を提示しました。

#### 他紙と比べて

長時間労働が問題になっている日本の学校の先生。コロナ禍で感染防止のための業務が加わり、さらに忙しくなっています。教育面「教育ルネサンス」でスタートした連載「教員の働き方」では、過重労働を防ぎ、新しい生活様式に対応するための学校現場の取り組みを紹介しています。学校と地域・保護者の協力が、コロナ禍を機に加速する可能性があります。